９月２１日（日）サムエル記第一１章２１～２３節

「この子が乳離れして、私がこの子を連れて行き、この子が主の御顔を拝して、いつまでもそこにとどまるようになるまでは。」

サムエルが生まれた後、エルカナは、その敬虔さは何があっても変ることなく、年ごとのいけにえを主に献げ、自分の誓願を果すために、家族そろって上って行こうとしました。しかし２２節を見ますと、ハンナとサムエルは上って行きませんでした。その理由をハンナは説明していますが、「サムエルが乳離れするまで（恐らく三歳前後）シロには上って行かず、家にとどまり、この子が乳離れしたら、ともに連れて行き、いつまでもそこにとどまるように」ということです。つまり、ハンナは自分の立てた誓願にどこまでも真実であろうとしています。自分の願ったとおりに子が与えられたら、自分の立てた誓願など関係ないとはハンナは決して思いませんでした。自分の苦しみを見、自分を心に留め、自分のことを決して忘れず、主は真実に祈りに答えてくださったことをおぼえて、自分も主の御前に真実であり続けようとしたのです。私たちも、信仰へと導かれた時に、聖霊が豊かに働かれ、その信仰告白は真実なものであったはずです。しかし、いつの間にか私たちは、自分の信仰告白を忘れてしまったかのように、主の御雨に不忠実な歩みをし、主のみこころを痛め、そして思い出したように自分勝手な祈りを主にするような信仰生活に成り下がってしまってはいないでしょうか。主はどこまでも私たちに対して真実を尽くしてくださいます。それに対して私たちも、不完全ではあっても、また弱く、無力な罪人であっても、主の御顔を拝して、いつまでもそこにとどまり続ける真実さを生涯失いたくないと思わされます。

９月２２日（月）サムエル記第一１章２４～２８節

「この子を主におゆだねいたします。この子は一生涯、主にゆだねられたものです。」（２８節）

２４節を見ますと、２２節で語ったとおりにハンナはささげ物を携えてサムエルをシロにある主の家に連れて行きました。ささげ物として子牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つとここにはありますが、民数記１５章８～１０節を参照するなら、これは特別な誓願を果すためのささげ物と考えられますが、ハンナは、ここで規定されている以上の物を献げています。もちろんエルカナは裕福だったのではと推測できますが、それ以上に主がハンナの祈りに答えて、サムエルを与えてくださったことに対するあふれるばかりの主への感謝の思いが、このささげ物に現れているように思います。

ハンナは祭司エリにもう一度自分のことを紹介するとともに、自分の願いを主がかなえてくださったので、「この子を主におゆだねいたします。この子は一生涯、主にゆだねられたものです。」と言います。そして主を礼拝しました。この２７，２８節で言わんとしていることは何だろうかと、

私自身も考えさせられました。その中で主から教えられましたことは、主が願いをかなえてくださったなら、それを主にゆだねる、主のものとして主におささげするということです。つまり、主が願いをかなえてくださったなら、私たちは、それを自分のものとし、あたかも自分の能力や尽力により勝ち取ったもののように考えます。そのようにして自分に栄光を帰してしまいます。そうではなく、主が願いをかなえて与えてくださったものは、主におゆだねして、一生涯主のものとするのです。そして主を礼拝し、主に栄光を帰すのです。私たちは、主が願いをかなえてくださったにもかかわらず、まるで自分のもののようにしてしまっているものはないでしょうか。主にゆだねるべきものはありませんか。

９月２３日（火）サムエル記第一２章１節

「私の心は主にあって大いに喜び、私の角は主によって高く上がります。」

角とは、人としてのプライドや強さを意味しています。そして、ハンナの場合には、彼女の尊厳のことで、「私の角は主によって高く上がります」とは、ハンナにサムエルが与えられることにより、ペニンナによって貶められたハンナの尊厳を主が回復してくださったことを意味しています。「私の口は敵に向かって大きく開きます。」とは、敵に対する勝利を意味しています。神の敵とは、神に信頼する者や神との親しい関係にある者に対して攻撃する者のことで、ここで言われている敵とは、ペニンナのことを指していると思われますが、主がハンナの胎を閉じているにもかかわらず、ペニンナは、ハンナをひどく苛立たせ、その怒りをかき立てました。（１章６節）そのことにより、ペニンナは主の敵とみなされたのです。ハンナにサムエルが与えられたことで、ハンナの尊厳は回復され、ペニンナにハンナは打ち勝ったのです。このことをハンナは主の救いとみなし、「あなたの救いを喜ぶからです。」と言います。

私たちの信仰に敵対する者は、主に敵対する者であり、私たちがあえて戦わなくても、主が私たちのために戦ってくださいます。そして、主は必ず私たちの角を高く上げ、私たちに勝利を与え、私たちが主を喜ぶようにしてくださいます。怒りや苛立ちのままに、自分で敵に復讐をしたり、戦おうとするのではなく、すべてを最善に導き、必ず勝利を与えてくださる主に、すべてをゆだねましょう。

９月２４日（水）サムエル記第一２章２節

「主のように聖なる方はいません。まことに、あなたのほかにだれもいないのです。私たちの神のような岩はありません。」

ここで強調されているのは主の比類のなさということです。主に比べられるものは何もありませ

ん。主の聖さは、特別な卓越性に表れています。例えば、主は贖われる方として、歴史の中に介入されるお方ですが、そのことは、主の比類のなさであり、主の卓越性と言えます。例えば、イエスラエルの民をエジプトの奴隷生活から救うために、みわざをなされたり、全人類を救うために御子をこの世に遣わされるというようなことです。それだけではなく、ハンナの胎を閉じ、ハンナの祈りに答えてサムエルを与えてくださることを通しても、ハンナは主のような方は誰もいないことに気がつかされたことでしょう。私たちは、これまでの信仰生活において主のように聖なる方はいません。あなたのほかにだれもいないのですと、告白せざるをえないような経験をしたことがあるでしょうか。主は、みこころのままに歴史に対して介入して贖いのみわざをなされるとともに、私たち一人一人を忘れることなく、目を留め、私たちに対してもみわざをなしてくださいます。それと同時に、「私たちの神のような岩はありません。」と、主が岩にたとえられていて、これは主の強さと守りを意味しています。比類なきお方は、岩なる主でもあられます。私たちは、そのことを信じて、ハンナのように主にのみ信頼し、主をたたえ、主を心から喜んで歩んでまいりたいと思わされます。

９月２５日（木）サムエル記第一２章３節
「まことに主は、すべてを知る神。そのみわざは測り知れません。」

ハンナは、人々に対して「おごり高ぶって、多くのことを語ってはなりません。横柄なことばを口にしてはなりません。」と言います。これは、口で罪を犯してはならないとの警告であり、それとともにおごり高ぶるということと横柄なことばを口にすることは、神に敵対することを意味しています。もし、主の御前にそのような態度を取り続けるなら、私たちは神の敵となり、神は、そのような者に対してさばきを下されるということです。私たちの謙遜は、時には沈黙の中に現れます。ただ人の前には黙って、主にだけ自分の苦しみ、嘆き、悲しみを言い表すのです。私たちの口にしている言葉が、私たちのおごり高ぶりや横柄さを現してはいないでしょうか。主が、すべてを聞いておられることをおぼえて、語ることばにも心を配りましょう。

「まことに主は、すべてを知る神」と言います。つまり、主は全知全能の神ということですが、それゆえに主のなされることはすべて正しく、公平だということです。「そのみわざは測り知れません」とのことばに対して私たちはどのように反応するでしょうか。主に信頼する者にとっては、主はその測りしれないみわざをもって、自分を守ってくださったり、祈りに答えてくださるということで、さらなる信仰が増し加えられます。しかし、神に敵対する者にとっては、主がどんなみわざをもって、自分にさばきを下されるか分かりませんから、それは恐怖以外のなにものでもないでしょう。私たちは、主がどのよう方か知っているのですから、主を恐れ、主に信頼して、主の御前に謙遜に歩む者でありたいと思わされます。

９月２６日（金）サムエル記第一２章４，５節

「勇士が弓を砕かれ、弱い者が力を帯びます。」（４節）

ここには、さまざまな人生の場面における逆転劇が語られています。それぞれ勇士と弱い者、満ち足りていた者と飢えていた者、不妊の女と子だくさんの女が、それぞれ対照的に出て来ていますが、勇士が勝利をすると思われていたのが、勇士の弓を砕かれ、弱い者が力を帯びて勝利をし、満ち足りていた者が、飢えることなく生きられると思っていたのが、逆にパンのために雇われて、働かなければ食べていけない状況に追い込まれます。不妊の女は子がなく、打ちしおれてしまいそうですが、逆に不妊の女に子が与えられることで、不妊の女が喜びに満たされることとなります。ここで一つ私たちが大切なこととして教えられますことは、もし私たちが恵まれていると思える状況にあるなら、それがずっと続くとは限らないということです。ですから、私たちはすべての栄光を主にお返しをして、謙遜に主に感謝をすべきです。逆に、もし私たちが今、苦しい状況に置かれ、悩みの中にあるなら、特に信仰による苦難を受けているなら、私たちはただ耐え忍んで、信仰をもって主を仰ぎましょう。主は、私たちがそのような苦難の中に置かれたままにされることはありません。そして私たちが信仰生涯を忍耐をもって全うするなら、主は私たちに勝利を与え、主が私たちに豊かに報いてくださいます。ここに、すべての人の人生の究極の逆転劇があります。どんな中にあっても、主を信じ、主を待ち望み、決して信仰を捨てるようなことのないようにしましょう。

９月２７日（土）サムエル記第一２章６～８節

「主は殺し、また生かします。よみに下し、また引き上げます。」（6 節）

ここでは別の例をあげながら、人生の逆転劇が語られています。特に、主は、主権をもって常に働かれて、すべてを治め、みこころをもってすべてを導かれます。ですから、仮にすべてが思いどおりに進んでいると思っても、主の主権を通してのみわざによって、自分の思っていたのとは全く異なる方向に進むこともあるということです。主は、人の命や人生を支配しておられます。ですから、「主は殺し、また生かします。」また、主は人生だけではなく、死後のことにも主権をもって働かれます。ですから、「よみに下し、また引き上げます」と言われています。主は、社会的立場においてもみわざをなされるので、「主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高くします。」と言われています。私たちは、日々の歩みの中で、どこまで主が私の命を支配していることを意識しているでしょうか。生きているのではなく、主によって生かされていると信じているでしょうか。仮に自分が貧しく、低く、弱い者、貧しい者であったとしても、それが主のみこころと信じているでしょうか。自分の能力がないからだと自分自身のことを嘆くのではなく、世の中の人のように、自分の置かれた環境のせいにして、社会や家族に自分の不平や不満をぶちまけつつ生きるのでもなく、主

が自分をそのようなところに自分を置いていてくださっていると信じて、その置かれた立場で謙遜に主に従っていけば、主が必ず私たちに大いなる人生の逆転を与えてくださいます。今の状態を主のみこころと信じて、謙遜に主に従ってまいりましょう。